

9/19 早稿

コロナ後遺症 目を向けて



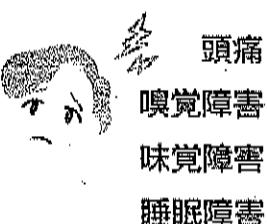
新型コロナウイルス感染症 後遺症の症状例

倦怠感

せき

脱毛

集中力低下



※厚生労働省研究班による

東京都の大学生は昨年5月、今年5月から社会経済活動はR検査で新型コロナの感染が判明した。当初は喉の痛みだけだったが、およそ1カ月後に体調に浮き沈みがあり、予定を入れられない。「思うように動けない人もいる」という厳しい現状もある。多くの人がきられず、学校も休みがちにならなかった。後遺症外来などで漢方薬や抗うつ薬などをもって治療を続けている。

新型コロナがらく病にならなかった

新型コロナウイルス感染者の一一定数がさまざまな後遺症に苦しむ状況が、複数の調査で少しずつ明らかになってきた。一方で5類移行後、後遺症の実態が見えづらくなっているとの声がある。街は流行前にきわいを取り戻してきたが、症状に苦しむ人は「少しでも良いので後遺症にも目を向けてほしい」と訴えている。

標準的な治療法 未確立

後遺症といつても感染との因果関係の証明は難しい。世界保健機関（WHO）は「感染から3カ月の時点でも流れ、少なくとも2カ月以上持続し、他の病気による症状として説明ができないもの」としている。世界で倦怠感、息切れ、記憶力の低下など200を超える症状が報告されている。

厚生労働省研究班は15日、オミクロン株を含めた感染者の1~2割に後遺症があつたとの調査結果を公表した。研究班の磯博康・国立国際医療研究センター長は「海外と同様に日本に苦しむ人がいることが示された」と説明。標準的な治療法は確立しておらず、「症状に悩む患者が適切な医療を受けられるよう

5類移行後 実態把握難しく

「あくまでは研究を続ける」と必要だと強調する。

東京都の別の調査による

流行当初に感じたであろう（思い通りにならない）もろかしさを忘れないでほしい」

後遺症で受診する人の多くがコロナの症状自体は軽かつたという。オミクロン株が流行中の昨年1~7月に感染し、後遺症の疑いで外来を受診した1~9人では、コロナ発症時に軽症だった人が71%

、中等症が4%、重症度不明が25%だった。

流行の後

お盆期間を経て全国の定点医療機関からの感染報告数は増え「第9波」とされる流行が続く。過去には後遺症に悩む人が流行の波から少し遅れて増加する傾向もみられた。後遺症に詳しい横山彰仁・高知大教授（呼吸器内科学）は「5類に移行後、感染者が全数把握されなくなつた」とに加え、感染しても受診しない人が増えた」と話す。中長期的に影響する後遺症の実態が把握しづくなっていることを心配する。対応が長期化する中で「苦しんでいる後遺症患者を見放さない」とが大切」と話している。